

上海にあつた日本の学校
東亜同文書院

朝日新聞編集委員
毛井 正勝



上海にあった本^目学校

東亞同文書院

目本

□₂2

東亜同文書院の軌跡

- | | | | |
|-------|--------|-----|-----------------------------------------------|
| 1901 | (明治34) | 年5月 | 上海に開設 |
| 13・7 | | | 中国の第二革命で校舎全壊、長崎県大村市に授業 |
| 13・10 | | | 上海の校舎へ復帰 |
| 17・4 | | | 上海虹橋路に新校舎完成 |
| 21・7 | | | 専門学校令による指定校制になる。省舎は外務省。この年の入学生から、修業年限が3年から4年に |
| 37・10 | | | 戦争激化で長崎市の校舎へ |
| 37・11 | | | 上海の校舎焼失 |
| 38・4 | | | 上海交通大学の校舎を借用 |
| 39・4 | | | 大学資格に伴い、予科生から入学。予科2年、専攻3年 |
| 45・8 | | | 戦敗で事実上閉校 |
| 46・4 | | | 上海残留の教職員、学生全員が帰国 |

埋もれる実態を記録

埋もれ 1400 人への質問

東洋同文書院	4日
(以下) 書院と略	15日
が掲げられおのづからは二	17日
年(大正)正月、九月十五	19日
日、東京市に、日暮野の血を引	21日
毎、年六、七十人が物故す	24日
「書院で中国語教育」	
「書院の政変」	
五期生(大正)入学し、それが	
六期生になった。最近成	
同窓会が、	
に三十三名と増えた。	
二、これは、書院で	
大々たる、政変、	
「書院で中国語教育」	
「書院の政変」	

東洋同人社大で最後は、
上層を渡した学が、
生じた。一九四五
(昭和二十年) 年の四十
六期生は全員、魚をええ
るとなぐ散じ、国内か
の土地と宿舎を得た。
戦局の緊化に要する、
現在の名古屋市にある大
羽航空機会社（旧長羽
航空）に預けられた。
分隊に集結したためであ
る。三九年、大空平科に入入
り四十期の普通科で八八
期生と直一(忠)と戦った。
町通(忠)は、現頃分隊で中出
語の講師を務めていた。
敗戦による帰郷、晋太夫



東亜同	
1901《明治	
13・7	13・10
17・4	21・7
37・10	37・11
38・4	39・4
45・8	45・4

外務省所管の社團に入て、事實目的の一つに「東郷の親善に寄与する人材の育成を期す」。

しかし、法人としての同窓会には、終えぬを迎えようとしてゐる。

敗戦による学校閉鎖にては経緯から、入学者を卒業した者（教務委員、理事委員、正副校長）が、後援の學校を喪失し、出陣、開校にあつた日本人のつゞけること

上海にあった本学校

東亜同文書院

1

1400人への質問

埋もれる実態を記録

中国・上海市の南西部にある上海交通大学のキャンパスは、春節（旧正月）を前にした二月初め、いつときの静けさの中にあった。人口千三百万余、建設で沸く市街地の熱気は、ここへはとどかない。

一九〇一年（明治三十四年）、貴族院議長近衛篤磨が初代会長を務めた東亜同文会が、上海に開設した日本の専門学校、東亜同文書院は三八年（昭和十三年）から敗戦で閉校する四五年八月まで、ここを臨時校舎にした。

かわらぶきの「赤門」は往時のままである。一步、校外へ出ると、商店が道路を挟んで並ぶ。ざわめきにまじって、日本人学生の高吟、出陣学徒の靴音が聞こえてくるようだった。

専門学校は三九年四月、大学に昇格する。本間喜一が学長を委嘱されたのは五十年前の四四年二月。この本間が四十五年にわたる東亜同文書院、東亜同文書院大学（以下「書院」と略す）の歴史の幕を引き、戦後、豊橋市に書院の血を引く愛知大学を設立する立役者になる。

愛知大学文学部教授（地理学）の藤田佳久（五三）は昨年暮れ、書院の卒業生約五千人のうち、現存する千四百五十人にアンケート用紙を発送した。

九二年十一月発行の同窓会名簿を見ると、現存者名が掲載され始めるのは一二年（大正元年）九月二十五日入学、一五年六月二十七日卒業の第十二期である。毎年六、七十人が物故する。「今、聞いておかなければ、書院の実態を埋もれさせることになる」という思いが、書院に学問的関心を寄せる藤田に、かつてない調査を決意させた。

質問内容は、その時代、書院生と先の戦争とのかかわりなどから、細部を六種類に分けた。

①日中戦争が始まった三七年（昭和十二年）、通訳として従軍した三十四期生②この期を除く三十九期生まで③大学昇格後の四十、四十二期生④学徒出陣した四十三期生⑤四十四、四十五期生⑥入学したが、上海へ渡れな

かった最後の四十六期生である。

回答が次々に届き、すでに三百五十通ほどになっていた。「これは、書院で学んだ人たちの遺言状ですね」と藤田。

「入学を希望した理由」「書院での中国語教育」「書院の教育で、今に継承したほうがいいと思う点、そうでない点」「戦後、書院をスパイ学校視する見方があったが、それについての考え」「戦後の中国とのかかわり」。質問は多岐にわたるが、回答は用紙の裏にまで及んでいる。

筆を持たない人は「自宅へ来てほしい」と願っている。人生を振り返るひとつの機会になったのだろう。

書院について記述された書物は多い。しかし、ほとんどが関係者によるもので、「今こそ、客観的にみてほしいと望んでい



上海交通大学の正門は、東亜同文書院・大学が借用していた当時のままだ。上海市内で

るようだ」と、藤田はいう。

書院開設の趣旨は「中国を富強ならしめ、中日提携の基礎を固めるため、それに必要な人材を養成する」だった。

当時の高等商業学校、高等学校程度の授業をめざしてスタートした書院の第一期卒業生（一九〇四年）は政治科六人、商務科五十四人。以後、主として、各府県での激しい選抜試験をくぐり、公費で派遣された十八歳前後の青年が、国際都市・上海へ向け、続々と海を渡った。

書院の特徴の一つに挙げられるのは、租界外の一隅に、開校されたことである。この特異性の是非はともかく、後の日中間の情勢は校舎焼失、通訳従軍、学徒出陣、閉校と、上海にあった日本の学校をほんろうすることになる。

（敬称略）

1944（昭和19）年2月

- 4日 文部省、軍事教育の強化決める
- 15日 名古屋市内で一般家屋の新增築禁止
- 17日 米機動部隊、トラック島を空襲。日本軍、航空機270機など失う
- 19日 東条内閣改造
- 21日 陸相東条英機が参謀総長、海相嶋田繁太郎が軍令部総長をそれぞれ兼任
- 24日 トヨタが戦時規格自動車の第1号を発表

上海にあった日本の学校

東亜同文書院

2

滬友会と霞山会

日中友好へ固い結束

東亜同文書院大学最後の学生になった一九四五年（昭和二十年）入学の四十六期生は全員、顔をそろえることなく散じた。国内から上海をめざした学生が、戦局の悪化で渡航できず、現在の富山市にあった呉羽航空機会社（旧呉羽紡績）の工場と宿舍を借りた分校に集結したためである。

三九年、大学予科に入った四十期の愛知大学名誉教授池上貞一（七五）Ⅱ豊橋市八町通Ⅱは、呉羽分校で中国語の講師を務めていた。

敗戦による帰郷、書院大学の国内移転・存続の望みをかけた呉羽での分校再開、四五年十一月十五日の授業打ち切り、残務整理。めまぐるしい日々を送っていた池上が、呉羽紡績からもらった厚手の紙と縄を持って上京したのは、この年の暮れである。書院を営営する東亜同文会の本部がある東京・虎ノ門の霞山（かざん）会館（今の霞山ビル）が、連合国軍総司令部（GHQ）に接収される、と聞いたからだ。

会館三階の書庫には大量の本があった。中華民国時代の社会、経済、政治、法律関係の本や報告書を中心

に三万五千冊といわれる「霞山文庫」である。

二十冊ほどをひと包みにし、縄でしばって運び出した。池上は終始、本をしばる仕事をしていたのか、それ以外は余り覚えていない。本は同文会の関係者宅へ運ばれ、接収を免れた。

この図書が半年後、愛知大学設立を文部省に申請する際、基礎的書物として役立つ。愛大豊橋図書館にある「霞山文庫」は、書院を研究する者にとって、今なお「宝の山」だ。

霞山文庫の霞山は、東亜同文会を一九八八年（明治三十一年）に結成した貴族院議長近衛篤磨の号である。霞山ビルにある財団法人「霞山会」は一九四六年三月一日、自主解散した東亜同文会の財産と事業を引き継ぐため、四八年に創設された。

現在、会長兼理事長を首相細川護熙の母方の叔父、近衛通隆が務め、常任理事、渡辺長雄（七六）Ⅱ川崎市Ⅱは書院三十五期生である。

中国関係の刊行物出版、中国語教育、人の交流を進め、

アジア、とりわけ中国と日本との友好を深めようとしている。

一月十二日、東京・日比谷で東亜同文書院・大学の同窓会「滬友（こゆう）会」の新年賀詞交換会が開かれ、約百人が集まった。

滬は昔、使われた漁具の一つで、漁村だった上海はこう呼ばれた。霞

山ビル内の事務所に詰める事務局
長、賀来揚子郎（七三）＝東京都練馬区＝は四十期生。「最近、父をもっと知りたい、といって訪れる遺族が多い」と話す。同窓会としては珍しく、外務省所管の社団法人で、事業目的の一つに「東亜の親善に寄与する人材の育成」を挙げる。

しかし、法人としての同窓会は、今年賀詞交換会も、上海で歌った院歌や寮歌で終わった。1月12日、東京・日比谷の中国料理店で



東亜同文書院の軌跡

- 1901（明治34）年5月 上海に開設
13・7 中国の第二革命で校舎全焼、長崎県大村市で授業
13・10 上海の仮校舎へ復帰
17・4 上海虹橋路に新校舎完成
21・7 専門学校令による指定学校になる。所管は外務省。この年の入学生から、修業年限が3年から4年に
37・10 戦争激化で長崎市の仮校舎へ
37・11 上海の校舎焼失
38・4 上海交通大学の校舎を借用
39・4 大学昇格に伴い、予科生が入学。予科2年、学部3年
45・8 敗戦で事実上閉校
46・4 上海残留の教職員、学生全員が帰国

としている。

敗戦による学校消滅という経緯から、入学者を卒業生とみなしているが、五千百人いた同窓は、千四百人を割った。

あと二十年もすれば、ゼロになる現実を踏まえ、「足腰の強いうちに結末をつけようじゃないか」（賀来）という方針が固まった。今春の総会で、社団法人解散の具体的方策が示されるはずだ。

だが、任意団体としての滬友会は、最後の二人まで続く。上海の地でつながり、卒業後も結束を緩めず、各界で力を出し切った男たちの決断だった。（敬称略）

各地を踏査し報告

「他に類をみないワールド・ワーク」と評価される実績が、東亜同文書院・大学にはある。卒業生がひとしお懐かしげにいう「大旅行」だ。今ふうにいえば、卒業記念旅行だが、最盛期は期間が三カ月から半年に及ぶ中国大陸探検の旅だった。専門学校時代は最終学年の三年（のち四年）、大学昇格後は学部二年の夏休み、上海を出発した。

書院は、日中間で貿易もままならなかった時代、中国の言葉や経済に通じた人を養成するため、設立された高等専門学校だった。それには中国の商慣習、地理、農村の実態などを知らなければならない。

こんな意気込みで、学生たちは四一六人のグループに分かれ、清末期から民国時代の中国各地はもちろん、シベリア、東南アジアにまで足を延ばした。ルートは延べ七百に上る。

愛知大学豊橋図書館には、主として、一九一三年（大正二年）卒業の十期から三三年（昭和八年）卒の二十九期までの学生が残した約四百冊もの大旅行調査報

告書の稿本がある。和紙をとじた厚さ五、六センチの記録は、日記と、卒業論文にもなったりポート部分に分かれている。

一九七九年、愛大に着任した文学部教授、藤田佳久（五三）は専攻の地理学から、この稿本に注目した。藤田の研究により大旅行の全ぼうが、次第に明らかになりつつある。

大旅行は一九〇八年（明治四十一年）卒の五期生から本格化する。日本人が初めて、足を踏み入れるコースが多く、各地で通貨が違うため、書院は銀を用意した。なべ、かま持参の野宿、徒歩や馬車での旅だった。

十五、六期くらいから金融、交通・水運、農業といったテーマが決まり、ピークを迎えた二十期代は多くの情報が集まり、アカデミックな色合いを強めた。

藤田は約十年前、学生が歩いた一コースを実地調査したことがある。

報告書は「真実を書く」「理屈をいわない」「あいまいなことは書かない」を鉄則にしたといえ、真実性と学生の实力を知るのが目的だった。このため、予定が発

直前に変更になり、予習不足だったはずのコースをわざわざ選んだ。

結果は、報告書の価値を再確認することになる。

藤田は中国という国は、組織が変わっても、農村部の景観や村落はそれほど変わっていない、とみている。それだけに、報告書は現在の中国の基盤である農村、地域の定期市場を中心とする小さな経済圏、多様な言語、通貨の違い、土地利用などを知るうえで貴重だ。

ただ、国際人を輩出する素地になった大旅行も、日中関係と無縁ではありえなかった。一九三七年（昭和十二年）には、出発して一ヶ月後の廬溝橋事件で、旅行は中止になり、三九年の大学昇格以後、往時の姿をとどめなくなる。



藤田佳久教授を東亜同文書院の研究に踏み込ませた四百冊に上る大旅行調査報告書の稿本は、愛知大学にしかない＝豊橋市の愛大豊橋図書館で

藤田の研究は日記部分から進んでいる。行く先々でありさつした知事の人物評価など、中国の各層にわたる人々がいきいきと描写されており、七百ものルートの点と点を結べば、線や面になって、広大な大陸の根底がうかがえるからだ。

しかし、膨大な報告書の中には判読に苦しむ字もあり、一人ではとても読破できない。愛大生、その父母、祖父母らの手を借り、清書する作業が続く。終わったのは、四分の一ほどだろうか。

その成果は、まず東亜同文書院中国調査旅行日記第一巻「中国との出会い」として、三月にも出版される。内容は、六期と八期の書院生二人が旅先で書いたファイルドノートが中心になる。（敬称略）

学生の目で見た「聖戦」

一九三七年（昭和十二年）九月三日、東亜同文書院院長、大内暢三は三四年入学の三十四期生に「告諭」を發した。日中両軍が激突した盧溝橋事件の約二カ月後である。

内容のあらましは「忠勇義烈の我が將兵とはいえ、現地に入っては言語に通ぜず、地理に暗いため、不便と支障が生じる。ついては、書院生の長所を發揮し、軍事通訳に、後方勤務に出勤し、祖国へ応分の奉公をしてほしい」であった。

三三年一月の第一次上海事変の際、上海にいた日本人の非難を振り切って、学生の国内総引き揚げを指示した大内の苦渋の決断といわれる。

こうして、第一陣五人、二、三陣各二十人、四陣十九人、五陣十五人、六陣一人と、三十四期生九十二人のうち八十人が、三七年十月下旬から十一月月上旬にかけて従軍の途につく。

書院はこの時、盧溝橋事件後、上海にまで及んだ戦火を避け、長崎市の仮校舎に移っていた。

七十七歳になる今も、岐阜市でイベント会場を設営する会社を経営する井上佑（ただし）は、羽島市正木町須賀は、郵送されてきた告諭を自宅で受け取った。

長崎で出発を命じられたのは十月十五日ごろ、と記憶する。東京までの切符が用意されており、寮の部屋を整理する間もなかった。途中、岐阜駅で父から軍刀を渡され、陸軍省で辞令、軍服、支度金約三百円をもらう。このころの三百円といえば、旧制中学校の五年分の授業料に相当した。

配属先は第一〇軍一一四師団一二七歩兵旅団。

広島港で乗船、上海へ渡った井上は、杭州湾から上陸し、南京へ北上する軍を「追求する」ことになる。頼りは出くわした軍隊の情報だった。中国軍を追撃する一一四師団と合流できたのは、太湖の南あたりである。

通訳従軍の名目は「皇軍の作戦に寄与する」とされたが、現実には現地調達に名を借りた略奪の案内役だった。鶏肉はささみだけ取って、残りは捨てる。井上には「大変なむだ」と映った。

戦闘要員でない従軍学徒は、砲弾が飛び交う間、ただ



通訳従軍した学生がくぐった中華門の周囲は、
古い城壁が残っている＝南京市内で

身をひそめる。

井上が南京の中華門をくぐったのは、日本軍がここを占領した十二月十三日の朝である。高い城壁の外には、鉄かぶとの後ろから銃撃された中国軍兵士が倒れ、内側には土のうがびっしり積まれていた。

◆ ◆
上海―南京間は現在、飛行機で四十五分。二階がある急行列車は途中、無錫にしかとまらず、約三百キロを四時間で走った。南京市街を取り巻く城壁は壊された所もあるが、中華門は観光客を迎えていた。周囲の道路は、車や自転車で混雑をさわめる。

◆ ◆
三十四期生は、通訳従軍記「長江の水天をうち」を出版した。それを読むと、学校当局に対し、従軍を嘆願した学生が戦地で見たものは暴行、略奪、放火であり、せいぜい惨な戦争に打ちのめされる姿だったことがうかがえる。

だが、「時代の流れとはいえ、従軍はやはりまずかつた」「あれでよかった」と、意見はなお分かれる。

井上が長崎へ戻ったのは三八年二月二十八日。同窓の石井勝はこの年の一月二十三日、安徽省で戦死し、遺骨で帰還する。卒業式は三月六日に行われたが、この時、まだ戦地にとどまる者がいた。「聖戦」の現実を学生の目でいち早く見たのが、七十歳代後半を迎えた三十四期生だった。

(敬称略)

身を捨てる覚悟持つ

昨春秋、出版された冊子「東亜同文書院大学と愛知大学」に載る一枚の写真を見て、「裏焼きではないか」と、疑問を持った人がいた。

書院大学四十二期生で、旧制愛知大学の一期卒業生でもある小崎昌業（七一）Ⅱ東京都港区Ⅱが、九三年度の愛大入学式（豊橋会場）で、記念講演した内容をまとめた文に付く出陣学徒の写真である。演題は「愛知大学の原点は東亜同文書院大学―その建学精神の継承と発展」だった。

撮影されたのは一九四三年（昭和十八年）十一月二十七日。壮行会場へ向う書院学生が、上海の繁華街、静安寺路を左肩で銃を支えて行進している。

出所は、四十二期生が七八年に刊行した記念アルバム「長江の水」だが、現地の新聞に掲載されたものと思われる。

アルバムの写真に見える看板の字、日の丸の旗を振るエプロン姿の婦人。いずれも不自然ではなかった。

書院の学生が出陣への抵抗をそれとなく示したのだ

ろうか、という思いがかすめ、幾人かの四十二期生に尋ねた。

「左肩に銃？そんなことはないだろう」「覚えていないな。こんな答えが多かったが、小崎は「疲れたので、右肩から持ち替えたのでしょう」と明快だった。

書院があつた上海交通大学と出陣学徒の壮行会場である虹口新公園（今の魯迅公園）は、上海市内の南と北。交通渋滞の激しい現在は、車でも一時間以上かかりそうだ。

上海にいた書院生も、国内の学生と同じように、生きて帰る気持ちなどなく、十二月一日、出陣したことは間違いなかった。

太平洋戦争が始まった四一年の四月、書院大学予科に入った四十二期生百七十人は東京に集結、恒例の伊勢神宮参拝、京都・奈良巡りをして四月十八日、入学式に臨んだ。

しかし、その後、予科は半年の繰り上げ卒業になり、四二年十月学部入学、四三年十月の学徒の徴兵猶予停止

に伴う出陣と、戦争の火の粉を全身にかぶる道を歩む。

◆ ◆
深谷敬一（七二） 〓大府市梶田町〓は十二月二日、安徽省・盧州の鶏（とび）三〇六二部隊に入営した。四四年四月から南京の陸軍予備士官学校「金陵部隊」で教育を受け、十二月下旬、盧州の原隊に戻っている。鶏部隊という名を多くの同期生から聞いた。

深谷は四五年一月、蘇州にあった矛（ほこ）部隊に転属になり、戦闘を経験した。五月には、本土強化要員として国内へ戻り、弘前市の東北五七部隊で終戦。八月二十日陸軍少尉、九月五日、召集解除になった。

当時を振り返り、「出陣には、みんな抵抗はなかった」と話す。

深谷と同期だったが、十二月一日以降の生まれなので、出陣が一年後になった姫宮栄一（七〇） 〓名古屋市千種区〓は、学生だから要領が悪く、毎日殴られる軍隊生活は、精神的に耐えられなかった。

中国で除隊になったが、現地にとどまる。居残った日本人がつくった病院や物産会社で通訳をし、四六年五月帰国。中日新聞記者になり、香港特派員を務めた。

南京にできた陸軍経理学校に入り、「中国兵と戦場で戦うことがなかったのは幸いだった」という小崎も当時

は、身を捨てて戦う気持ちだった。その小崎は後年、モンゴル、ルーマニア大使として、日本外交の一翼を担う。

上海で学んだころの話をとおらかに語る書院卒業生も、出陣となると口はやはり重い。「若かったですからね。命令のおもむくままに行つて。だが、我々は書院学生ですから、中国のために戦っていると信じていました」と話した人は、姓名を出すのを断わった。
（敬称略）



出陣する書院学生は、上海市の目抜き通りで、在留日本人の激励を受けた＝東亜同文書院大学四十二期生の記念アルバム「長江の水」から

才覚生かし愛大開設



故 本間喜一さん



木田彌三旺さん

東亜同文書院大学をみとる学長になった本間喜一が就任したのは、五十年前の一九四四年（昭和十九年）二月である。以後、日本の敗色はますます強まるが、本間には最後の学長として、四五年八月の事実上の閉校、学生、教職員の国内引き揚げに当たって、その手腕を発揮する。

帰国してからは、豊橋市の陸軍予備士官学校跡に愛知大学を設立、初代の最高裁事務総長を務めたあと、二度にわたり愛大学長になる。本間こそ、書院と愛大を結ぶ橋渡し役を果たしたといえる。

岐阜市清住町、愛大監事木田彌三旺（みさお）（七九）は、勤めていた南満州鉄道の給費派遣生として書

院に入った。卒業後、書院大学の中国語の講師、教授になり、事務局長役もしたため、本間と深くかわることになる。

木田は「終生、人を大切にされた先生は、人生の達人でした」と、本間の人柄を振り返った。

本間が持つ才覚の一面を表すエピソードとして、今も語られているのが、戦後から引き揚げまで、上海にいた人を支えた資金づくりである。

早い時点で、敗戦を予期していたうえ、ドイツに留学した本間は、第一次大戦後のすさまじいインフレを経験していた。

四五年初め、乗るつもりもないフォードの新車を八百万円で買い、この年十二月には学生、教職員の一ヶ月分の費用に当たる二億三千万円で売っている。

三七年に焼き打ちに遭ったキャンパス内の運動場も入札で売り、代金に金の延べ棒を求めた。紙幣が紙きれ同然になる日を察知していたのだろう。

延べ棒は結局、手付けの九本（一本八十匁、三百匁

ラム)しか受け取れなかったが、本間は心配する職員をよそに、世話したことがある中国人に預ける。中国人は必要に応じて、延べ棒を相場で両替し、届けた。

木田はこの延べ棒を運んだ時のことを鮮明に記憶する。これが上海北部の「集中営」で帰国を待つ学生、教職員の生活費になった。

◆ ◆
木田は四六年二月二十六日、上海をたった。岐阜市に着いたのは三月一日夜。焼け野原の岐阜駅前から見た町の灯は、キツネ火のようだった。母と妹はバラックにいた。

すぐ上京した。書院の教職員の退職金支払いなどの残務処理があったからだ。

東京・神田に開いた仮事務所へは、学生が詰めかけた。ここで、木田たちが持ち帰った学籍簿と成績簿が威力を発揮する。本間は、いったん中国に接収されたこれらの書類を取り戻していた。だが、国内の学校もいっばいで、編入は困難な情勢だった。

本間は四六年五月、早くも海外から引き揚げた学生、教職員のために、大学設立の準備を始めた。これからは、十一月旧制愛知大学の設立認可、四七年一月予科、四月法経学部の開設と、木田が「今思えば、夢のようです」という速さで、本間の執念が実る。

後に、本間は「引き揚げ者に対する同情があつたらだろう」と述懐している。

豊橋を選んだ理由はすぐ使える軍の土地や建物があつたからだなどといわれるが、木田は、当時の豊橋市

長横田忍を高く評価している。「大学というのは大変ですよ」という本間に、横田は「オレは三河人だ。まかせておけ」「もしもという時は市立大学ということもある」と応じた。

事実、市が最初出した二十万円で校舎の窓ガラスの補修や板の打ちつけをした。これも、八七年に九十五歳で亡くなった本間の話である。
(敬称略)



本間喜一さんが創立したころの姿をとどめる愛知大学の木造本館
＝豊橋市町畑町で

愛大、個性求め見直し

一九〇一年（明治三十四年）から四五年（昭和二十年）まで、五千人の卒業生を送り出した日本の学校を、中国の人々はどう見ているのだろうか。二月初め、東亜同文書院大学があった上海交通大学を訪ね、国際交流処副処長で動力機械工程教授の童澄教（五三）に話を聞いた。

童は八十年四月から二年間、東京大学工学部に留学した知日派。しかし、書院の名は、日本人から聞くまで知らなかった。まず資料がない。機会があれば、書院について研究したいという童は、書院出身者を「遠慮しているようだ」「恩返しをしようとしている人がいる」と評した。

最近、横光利一の小説「上海」を翻訳出版した南京外国語学校日本語科主任の滕忠漢（四二）にとつては、初めて耳にする名だった。

昨年十一月、愛知大学を訪れた復旦大学（上海市）の歴史学系教授黄美真は「研究は始まったばかり。一次資料が少なく、散在している」と述べた。書院は、現代中国で長く、追いやられていたようである。日中共同研究の土俵づくりが、今後の課題といえそうだ。

書院大学四十三期生で、四九年愛大卒の吉川績（七〇）Ⅱ所沢市Ⅱは今日十五日、学生時代を送った上海交通大学へ戻った。

昨年九月から外語系日語教室で、大学の三、四年生三十人、修士、博士課程の院生三十人に日本語を教えているからだ。

授業は、一学期（九月―一月中旬）が週十二時間、二学期（二月下旬―七月末）は八時間。一学期の院生の成績は、平均八十七点だった。満足している。

「対日感情はいいですよ。日本の風土、風俗、習慣を話すと、学生は喜びます。彼らにとって、日本は未知の国なんですな」。楽しそうに語る吉川の活動は、ボランティアである。童がいう恩返しなのだろうか。

書院三十五期の小泉清一（七七）Ⅱ岐阜市宇佐二丁目Ⅱは、岐阜県日中友好協会の中国研修生対策委員と常任理事を務める。中国から縫製工場などへ来る研修生に日本の地理、歴史、文化を教える小泉が、何よりも心配するのは、企業が利益を追求するあまり、研修生が過重



冬休み中の上海交通大学の構内を子ども連れの市民が散歩していた＝上海市内で

な状況に追い込まれることだ。

「単純労働の担い手ではなく、進んだ技術を教えるのが建前なのです」と強調した。



一月十二日、書院の同窓会「滬（こ）友会」が、東京で開いた新年賀詞交換会に、愛大の学長石井吉也、教授の今泉潤太郎、藤田佳久らが出席し、エールを交わした。愛大は数年前から書院研究に積極姿勢をみせている。

しかし、両者は無縁、とされた時期がある。学生の「大旅行」は一種のスパイ活動ではなかったか。日本の中国侵略に加担したのが、通訳従軍ではなかったのか。書院をこう見た蒋介石の中国政府は、愛大を書院の復活と非難した。

また、連合国軍総司令部「GHQ」は、愛大創立時の四七年初め、「書院教授の採用は、決定ずみの人はやむをえないが、今後は認めない」と指示する。双方がソッポを向かなければならない情勢だった。

大学紛争が続発したころも、書院は排除される側にあった。

しかし、時代は変わり、昨年五月、愛大豊橋キャンパスに「東亜同文書院大学記念センター」ができた。敗戦で、二十世紀前半の四十五年間にわたる歴史を閉じたはずの書院は、二十一世紀を目前に、個性を中国に求める愛大で、見つめ直されようとしている。

（おわり＝敬称略）